

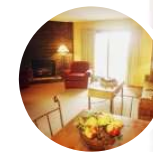
2016年9月8日

私立大学情報教育協会
教育改革ICT戦略大会発表

アクティブラーニング 「異文化コミュニケーション」 学習者が主体的に学ぶ教室

東北工業大学ライフデザイン学部
経営コミュニケーション学科
大石 加奈子

Contents



アクティブラーニング「異文化コミュニケーション」学習者が主体的に学ぶ教室

1

はじめに

2

授業の概要

3

PBLの実施方法

4

学習者の感想

5

所感と今後の課題



1 はじめに

- ・ P B L の定義と特徴
- ・ 本発表の目的



アクティブラーニングの一つである **PBL**（Project-Based Learning 課題解決型学習）教育とは

Project-Based Learning とは

近年、学問の発展と
複雑化・細分化して
いる

大学教育では知識や
技術の伝授よりも、
個々の学生に適した
方法論の習得と確立
が重視される

従来型の「講義」
の積み上げにより、
教える量を増やして
も、現在の多岐にわ
たる学問分野をすべ
て学べない。

反対に多くの学習者
が目的を見失い、
意欲を削がれる

PBLは、
課題解決という目標
に向かって、学習者
が自ら必要な知識を
収集して意欲的に取
り組め、自発的な学
びの力をつけられる
教育方法



PBL（Project-Based Learning 課題解決型学習）の特徴

チーム編成

1チーム4から6名の学習者チームで行う

テーマ設定

解決方法が知られていないオープンなもの

学生主体

課題解決のための情報収集、問題探索、原因究明、解決策立案、実施計画立案など、学生が互いに協力して行う

得られる力

通常の講義などでは得られない実践的な力（自己学習力、課題解決能力、チームで協働する力、プレゼンテーション能力、論理的思考力など）



本発表の目的

- ❖ 本学で3年生を対象に行っている「異文化コミュニケーション」の科目にPBLを取り入れた
- ❖ この授業では、今日のグローバル社会において学習者自身が多文化共生できる社会を実現できる人になることを目標としている
- ❖ 本発表では、PBLを通じて学習者自らがどのように多文化理解を深め、どのようにして協働で課題解決し、アクティブラーニングでしか得られない力をつけていったかについて報告する



2

「異文化コミュニケーション」 授業の概要

- ・ 異文化コミュニケーションの定義
- ・ 授業の目標



「異文化コミュニケーション」の定義

- ❖ 「異文化コミュニケーション」とは、
自分の文化と異なる文化をもつ人との相互交流
(情報のキャッチボール・交換)
- ❖ 自分たちの文化をただ押し付けるのではなく、異なる文化を受け入れる難しさを互いに理解し、異なる価値を認め、一緒に **協力** できること



「自分の文化と異なる文化を異文化をもつ人」は、
外国人だけではありません

自分以外のすべての人は
異文化に属する人

欧米人

両親

同級生

先輩や後輩

兄弟

親友

他府県の人

異なる職業の人

在日外国人

同郷の人

異性

アジア人



15コマの授業目標

多文化共生社会を

実現できる人になる

日本人同士はもちろん、外国人を含むすべての住民と対等な関係を築き、一人ひとりの価値観・個性・能力を尊重できる人になろう

学びの主な内容

- 文化とは何か自分で説明できる
- 固定観念やステレオタイプにとらわれない
- 言語・非言語コミュニケーションを活用できる
- 自分の文化を知っている
- 異文化を尊重し受容できる
- アサーティブコミュニケーションができる
- 多文化共生社会実現のための提案ができる
(後半の7回でPBLを実施)



3 P B Lの実施方法

- ・ P B L で取り上げた課題
- ・ P B L のスケジュール
- ・ 7回の P B L 実施の詳細



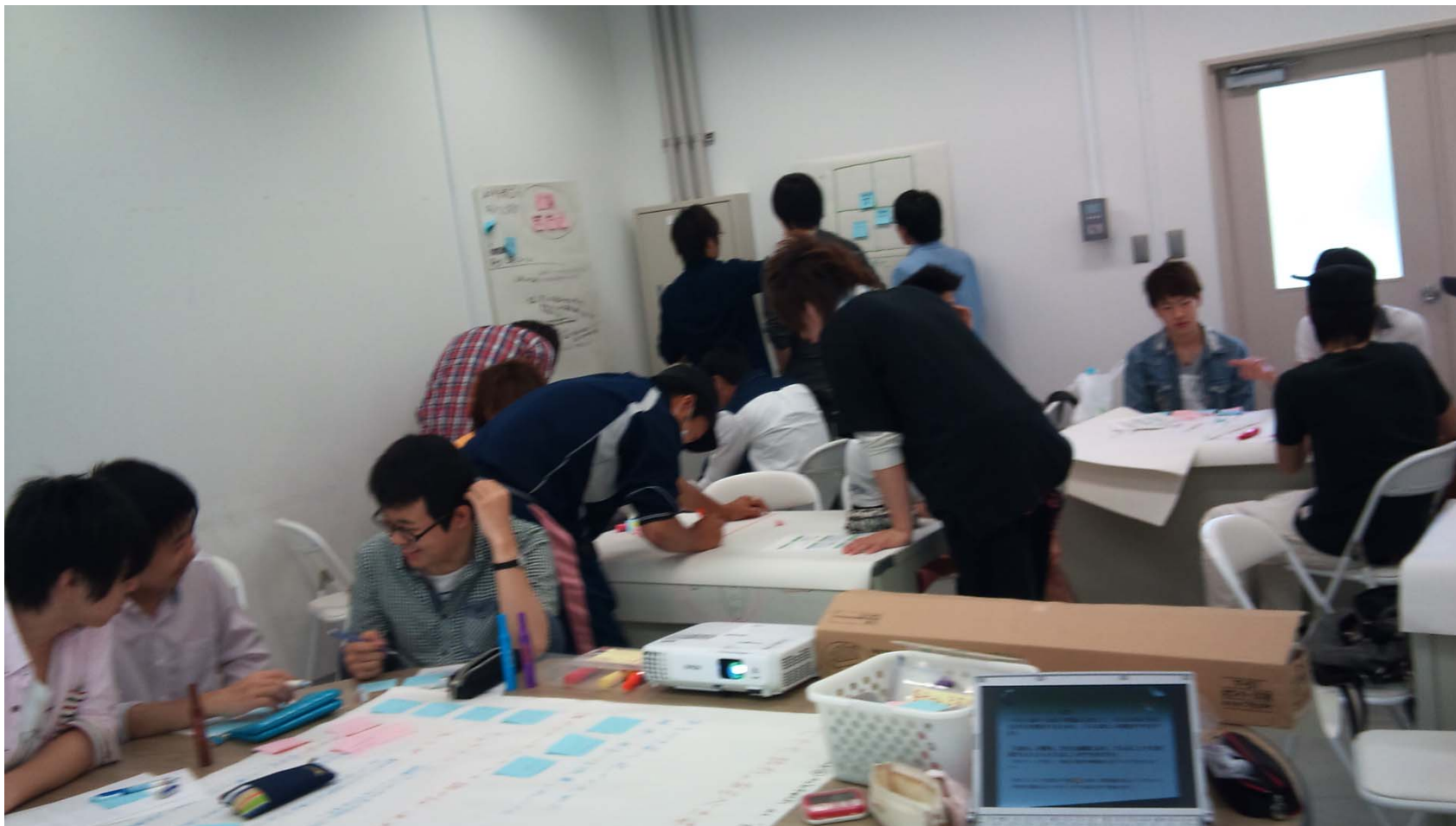
課題

多文化共生社会実現をするために

- ❖ あなたは前半7回の授業を通じて、異文化コミュニケーションを学び、多文化を共生社会を築ける人になるための知識を身につけました
- ❖ 後半の7回の時間では、PBLを通じて、未来に向けて私たちの街、宮城県が理想的な多文化共生社会になるように新提案をします

PBLとは:プロジェクト・ベースド・ラーニング(課題解決型学習)

「異文化コミュニケーション」PBL実践風景



知識の収集や資料作成はPC演習室で行い、教室では議論を見える化して活動を進める



2016年度「異文化コミュニケーション」後半7回の予定

- 6/1 6 チームを決める（チームの人数は4 - 6名）
チームのリーダーと話し合いのルールを決める
- 6/2 3 その共同体（例えば小学校）が、理想的な多文化共生社会になったときの様子を皆でイメージする
その共同体での現在のコミュニケーションの課題を挙げる
- 6/3 0 解決すべきよい問題を選び、問題が起きる原因や解決のためにすでに行われていることを調べる
多文化共生のための私たちの新しい提案する
- 7/0 7 多文化共生のための私たちの新しい提案のステップ
- 7/1 4 発表用のスライドづくり
- 7/2 1 各チームによるプレゼンテーション
- 7/2 8 プレゼンテーション予備日・全体の振り返りとレポート提出



6/16 チームを決める

「多文化共生社会実現のための提案をする」

あなたはどの共同体の誰に提案したいですか。そこがあなたの入るチームです。

- 仙台市（仙台市長へ提案）
- 宮城県の特定の地域（自治会長へ提案）
- 宮城県の小学校（文部科学省へ提案）
- 宮城県の中学校（文部科学省へ提案）
- 宮城県の高等学校（文部科学省へ提案）
- 宮城県の大学（文部科学省へ提案）
- 東北工業大学（学長へ提案）
- 宮城県の企業（経済産業省へ提案）
- 宮城県の特定の会社（代表取締役へ提案）



各チームのリーダーとルールを決める

チームのリーダー

[

]さん

チームのメンバー

私たちのチームの基本ルール

すべきこと

例

- 人の話を積極的に聴く
- 楽しく議論する
- 他人の意見をもとにして自分の意見を言う
- パソコンでの調べごとには集中する

すべきでないこと

例

- 話し合いのテーマと違う話をする
- 人の意見をけなす
- 特定の人だけが長々としゃべる
- 話し合いに参加しない
- 遅刻する

毎回の話し合いの役割を決める

❖ ファシリテーター

話し合いの進行をする人

❖ グラフィックカー

模造紙に話し合いの内容を見える化する人

❖ タイムキーパー

話し合いの時間を管理する人



本日6/23の進行手順

チーム活動は、時間を区切って行います
タイムキーパーさん、よろしくお願いします

STEP 1

あるべき姿を描く

その共同体（例えば小学校）が、理想的な多文化共生社会になったときの様子を皆でイメージする（10分）

STEP 2

問題設定をする

その共同体での現在の問題点を挙げる（理想の状態に近づくために解決あるいは改善したいこと）（15分）

STEP 3

情報収集する

インターネットでその問題と原因について調べる 調べごとの役割分担をしてから、PC演習室に行く（30分）

STEP 4

情報共有する

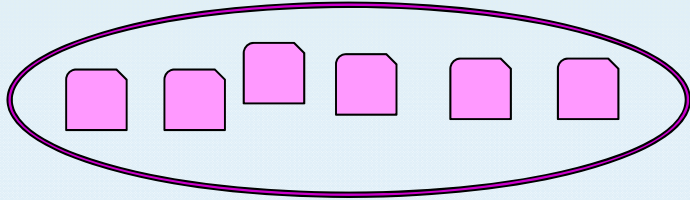
教室に戻り、インターネットで調べたことをチーム内で共有する（15分）



1 その共同体のあるべき姿を描く

10分

未来の（日本の小学校）のあるべき姿



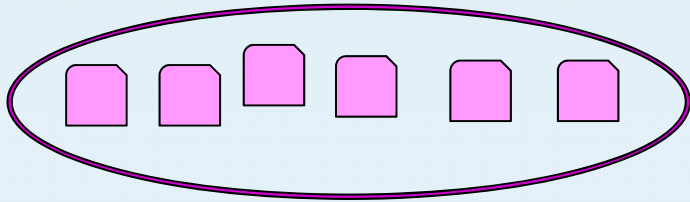
- ❖ その共同体が、理想的な多文化共生社会になったときの様子を一人ひとりでイメージする
- ❖ 一人1枚以上、ピンクの付箋に短い1文で書いて貼る
- ❖ 全員が貼り終えたら、ファシリテーターは一人ひとりにその様子を話してもらう



2 課題設定をする

15分

未来の（日本の小学校）のあるべき姿



あるべき姿に近づくために
解決したい問題点や、改善したい現状



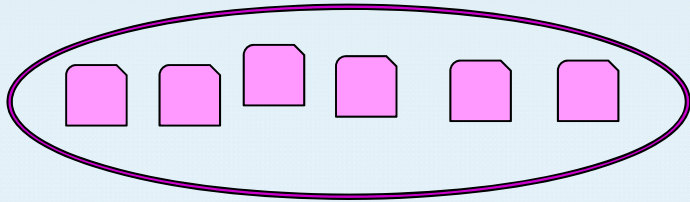
- ❖ その共同体での**現在のコミュニケーションに関する問題点**（あるべき姿に近づくために解決したい問題点や改善したい現状）を一人ひとりが考える
- ❖ 一人1枚以上、青い付箋に短い1文で書いて貼る
- ❖ 全員が貼り終わったら、ファシリテーターは一人ひとりにその様子を話してもらう



3 問題についての情報収集をする

5分

未来の（日本の小学校）のあるべき姿



あるべき姿に近づくために
解決したい問題点や、改善したい現状



誰がどのことについて調べるか
決める

- ☐ 茂ヶ崎さん
- ☐ 野草さん
- ☐ 八木山さん
- ☐ 長町さん

- ❖ 青い付箋のことに
して、パソコンで情報
集をするため、だれが
どのことについて調べ
るか役割を決める
- ❖ ファシリテーターは、
一人ひとりにどれにつ
いて調べたいかを聞く
- ❖ 担当の人は皆に説明で
きるように責任をもっ
てR231で調べてくる

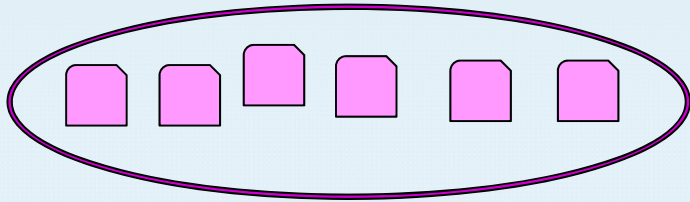
調べる時間は30分



4 情報共有をする

15分

未来の（日本の小学校）のあるべき姿



あるべき姿に近づくために
解決、あるいは改善したいこと



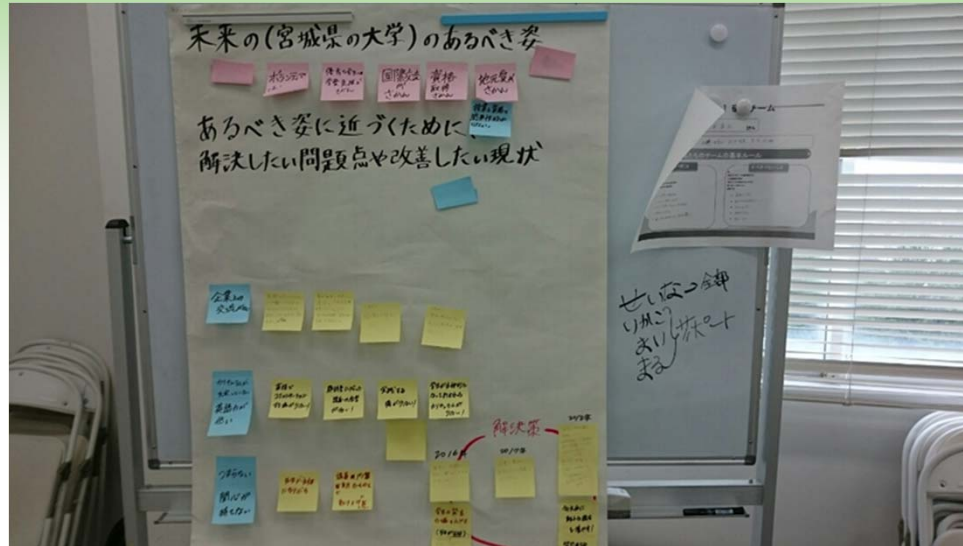
誰がどのことについて調べるか
決める

	茂ヶ崎さん	
	野草さん	
	八木山さん	
	長町さん	

- ❖ 調べてきたことについて、チーム内で一人ひとりが説明をする
- ❖ ファシリテーターは、時間内に皆が話せるように進行をする
- ❖ グラフィックカーは、話された内容の要点を簡単に書き取る



本日6/30の会議の達成目標



1 前回、チームでたくさん出した問題点の中からよい問題点を1~3つ選ぶ

2 選ばれた1~3つの問題点を解決する新しい策について提案を始める



今回6/30 の進行予定

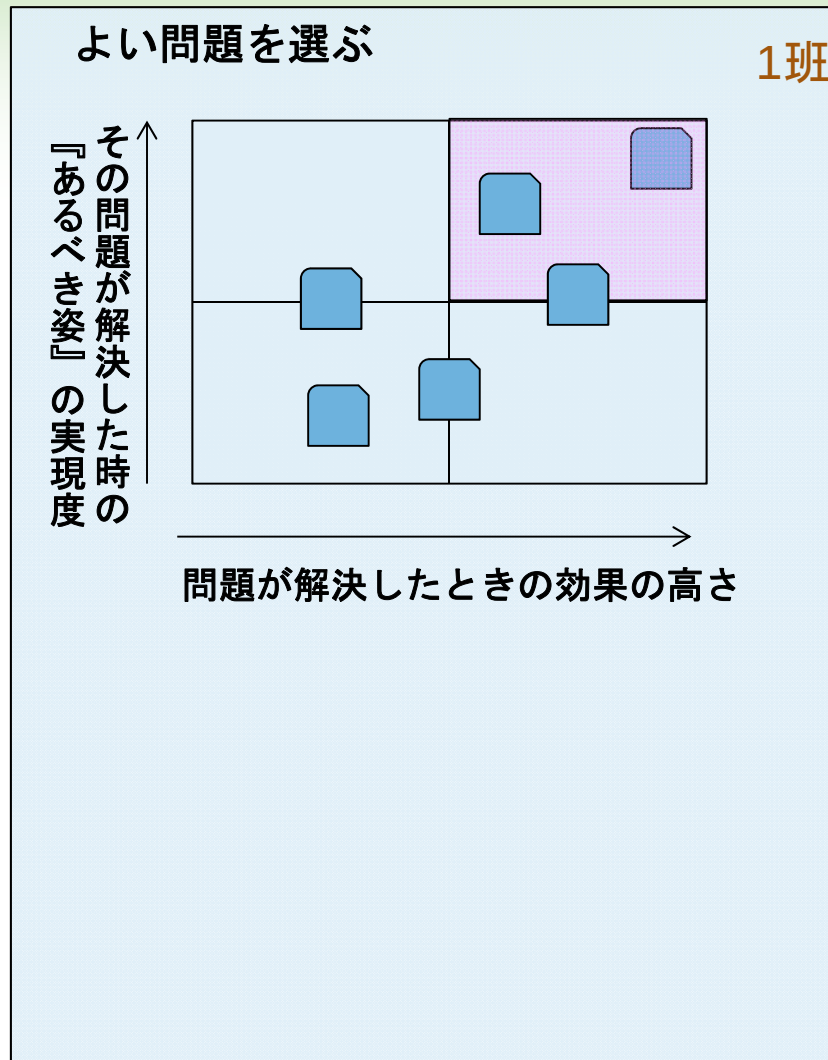


- 1 たくさんある問題点の付箋■の中から、重要なものを1~3枚選ぶ **(10分)**
- 2 インターネットで次の2つを調べる **(30分)**
 - ① チームで選んだ1~3つの問題点に関して、より詳しい知識を調べる。問題が起きる原因など
 - ② その1~3つの問題点を解決するために、その共同体で、すでに行われていることを調べる
- 3 調べたことをチーム内で情報共有する **(15分)**
→模造紙に要点を書きとる
- 4 問題解決のための新しい提案をする **(10分)**



1 よい問題を選ぶ

(10分)



たくさんの問題点の中からよい問題点を1~3枚選ぶために、グラフィッカーは左のような枠を書く

ファシリテーターは質問する

➤ 「その問題が解決されると、
どれほど、「あるべき姿」を実現できますか」

➤ 「その問題が解決されると、
どれほど高い効果が得られますか」

この2軸をもとに話し合い、
何度も青い付箋を動かして、
ピンクの理想ゾーンに入るものを、
1~3枚選ぶ

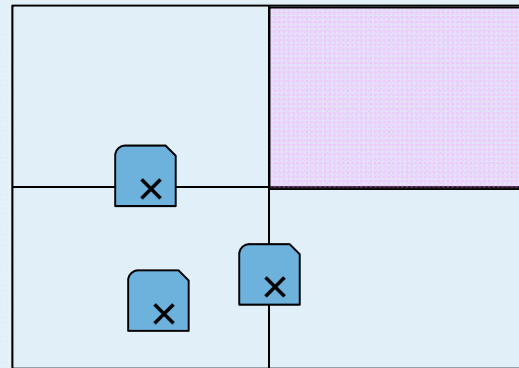


2 インターネット で情報収集する (30分)

よい問題を選ぶ

1班

『その問題が解決した時の
あるべき姿』の実現度



問題が解決したときの効果の高さ

選ばれた付箋について情報収集の分担をする

- 1  野草さん
八木山さん
- 2  茂ヶ崎さん
長町さん
- 3  ニツ沢さん
香澄さん

- ❖ パソコン室ですること
 - ① チームで選んだ青い付箋について、より詳しく調べる。問題が起きる原因など
 - ② その共同体で、①のことを解決するために、すでに行われていることを調べる

- ❖ 情報収集に出かける前に
 - ・ だれがどのことについて責任をもって調べるかを決める

- ・ 教室に戻ってくる時間を皆で決める

→ 戻ってから皆で情報共有



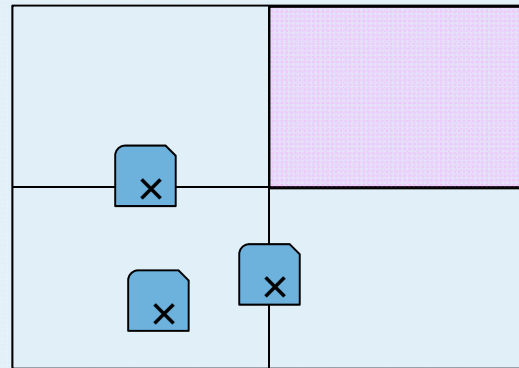
3 情報を共有する

(15分)

よい問題を選ぶ

1班

その問題が解決した時の
『あるべき姿』の実現度



問題が解決したときの効果の高さ

選ばれた付箋についての知識を共有する

- 1  野草さん
八木山さん
- 2  茂ヶ崎さん
長町さん
- 3  ニツ沢さん
香澄さん

❖ 皆が教室に戻ったら、調べた知識をチーム内で共有する

ファシリテーター質問

「その問題について、もっと調べてわかったことを教えてください」

「それが起きる原因は何ですか」

「その対応策として、すでにどんなことが行われていますか」

グラフィッカーは模造紙に要点を書きとめる

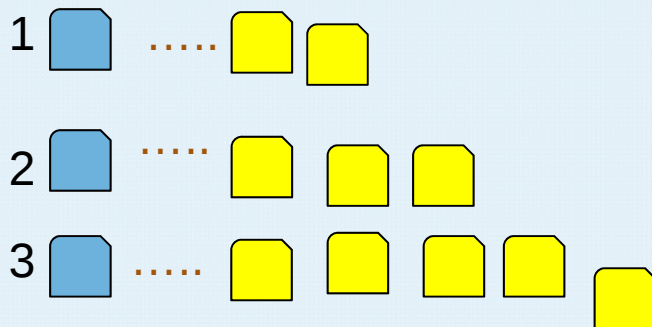


4 解決策を考える

(10分)

解決策を考える

多文化共生実現のための新しい提案を書く



ファシリテーター質問

「今まで調べた問題を解決して、その共同体で多文化共生を実現させるために、どんな新しい提案ができますか」

「お金も、時間も、労力も無限にあり、どんなことでも実現するとしたらどんなことができますか」

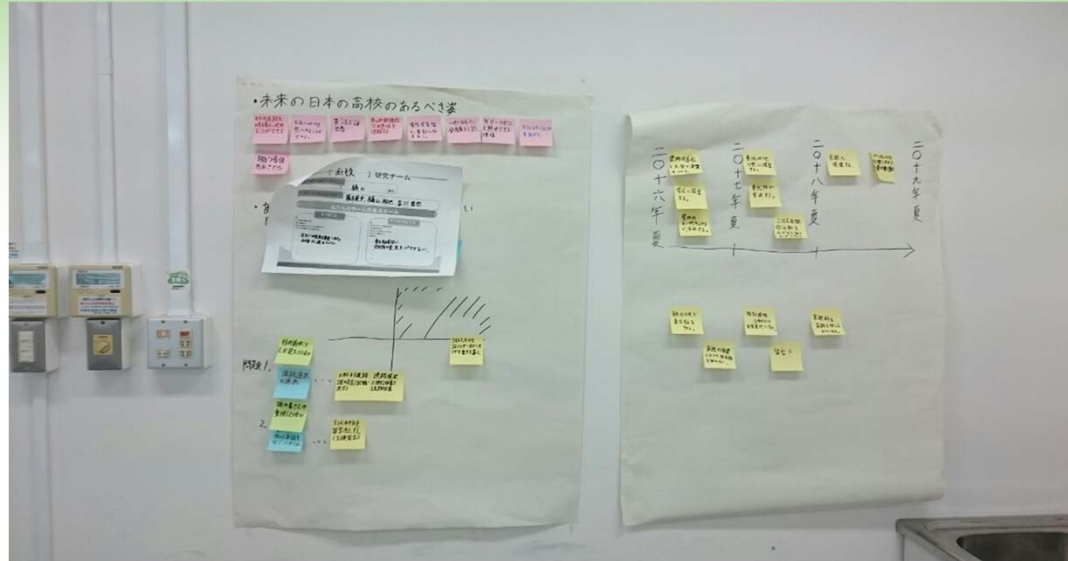
「出たアイデアを黄色い付箋  に書いてください」

「1枚の付箋には1つのアイデアを短い1文で書いてください」

「書いたら模造紙に貼り、提案内容をチームメンバーに説明してください」



本日7月7日の会議の達成目標



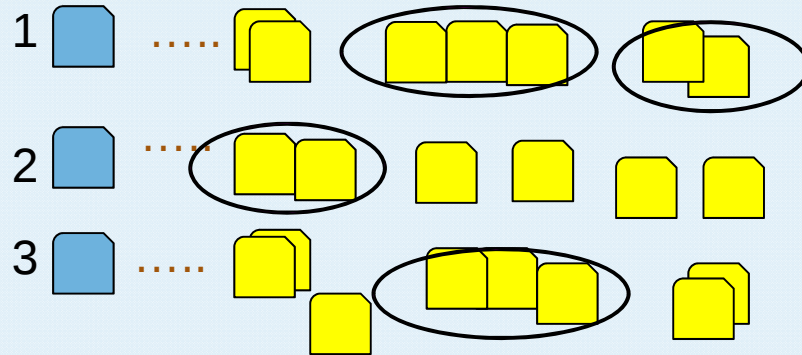
- 1 問題を解決して多文化共生を実現するための新しいアイデア（解決策）を出す
- 2 それらのアイデア（解決策）の中からよいものを選ぶ
- 3 それらの解決策を、2年以内にどの順番で実現していくかを定める



2 よい解決策を選ぶ

(15分)

解決策を収束する



❖ 同じ内容の付箋は重ねて貼る

❖ 似ているものは近くに貼ってグルーピングする

❖ ファシリテーター 4 つの質問

①「その提案は、確かに多文化共生を実現させますか」

②「その提案には、新しさがありますか」

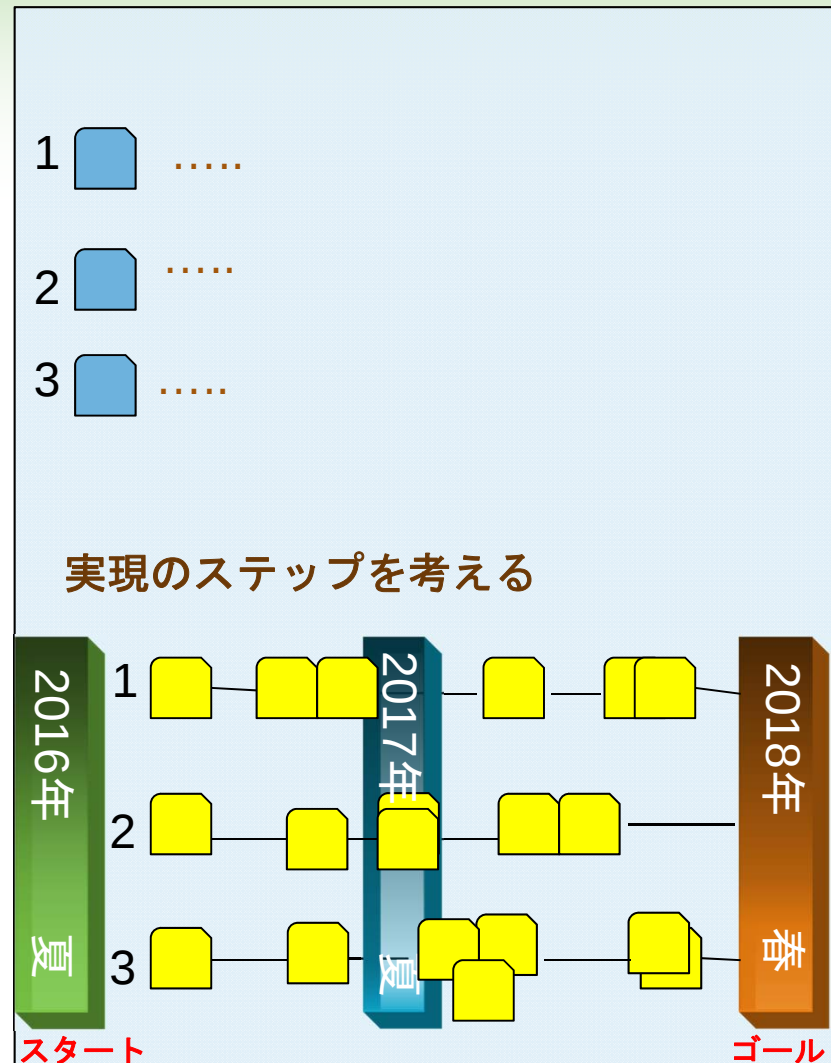
③「それは文部科学省（市長、自治会長、学長、経済産業省、代表取締役）に実行できることですか」

④「2年以内に実現できることですか」

そう思わない付箋を、皆の合意ではがしていく



3 解決策実現のステップを決める (15分)



- ❖ 今年の夏から2018年春までの間に、どの順番で案を進めていくかを付箋を動かしながら皆で話し合う
- ❖ 足りない内容があれば、新たに黄色い付箋に書いて貼る
- ❖ グループになっている付箋はグループのままで並べる
- ❖ 並べ終わったら、提案実現の順番に、つながりがあるか、皆で確認する



本日7月14日の授業目標

プレゼンテーションの準備を終える

1. スライドの内容をこの紙に下書きする
2. どのスライドを誰がつくるかを決める
3. PC演習室でスライドを皆で作って合わせる
4. 自分でつくったスライドを自分で説明できるように練習する
5. チーム全員が立って一人ずつ発表練習する
6. 各チーム発表時間は10分以内です



スクリーンの横にチームメンバー全員が全員立って順番に話す



PC演習室で発表スライドづくり





7月21日 各チームのプレゼンテーション



仙台市市長 奥山恵美子様
2016年7月21日

仙台市における待機児童数削減に関するご提案

減らさなきゃ(使命感)

東北工業大学 ライフデザイン学部
経営コミュニケーション学科 3年
櫻井貴大、秋庭聖太、大場遼太、佐藤大

東北工業大学 学長 今野弘様

東北工業大学における
多文化共生社会実現の
ご提案

東北工業大学 ライフデザイン学部
経営コミュニケーション学科 3年
三浦諒太、今野国治、三坂勇登、西條陸

利府のオリンピックにおける
問題の解決策の提案
2020年の東京オリンピックに向けて

東北工業大学 ライフデザイン学部
経営コミュニケーション学科 3年
加藤聖也 菅野元気
木村圭祐 村井慎司

文部科学省初等中等教育局局長 藤原様
2016年7月21日

日本の小学校における
多文化共生社会実現のご提案

久慈朋弥
吉田洸太
菊池遼
芳賀諒
石垣志良聖

日本の高等学校における
多文化共生社会実現のご提案

東北工業大学 ライフデザイン学部
経営コミュニケーション学科

菅原礼祐 佐藤由梨香 板垣亮平 木村一気





4 学習者の感想





学習者の感想 1

- ❖ 「授業を振り返り、とても印象に残っているのはPBL「多文化共生社会の実現に向けて」です。自分たちでチームを組み、リーダーを決めて、話し合いのルールを決めました。話し合いのルールでは遅刻をしないというのがありました。私は、寝坊して遅刻しないように心がけました。私たちは東北工業大学について話し合いました。東北工業大学が、理想的な多文化共生社会になったときの様子をチームのみんなとイメージして、その共同体での現在の問題点を挙げていきました。（中略）チームでやることにより問題を見つけることができましたと思います。自分一人では思いつかない問題を挙げられることもありました。問題の原因や解決策についても同じことを思いました。」



学習者の感想 2

- ❖ 「他の授業とは違い、チームで協力してやるので楽だということではなく、**チームでやらないと分からないこと、気づかなかったことがわかる**など、勉強になり楽しかったです。」
- ❖ 「解決すべき問題点を見つけることや、その原因を調べて解決に導くことをチームでやることにより、**協力して何かを成し遂げる**ことはよいものだと思います。さらに協力することは大切だと思います。**多文化共生社会のための新しい提案について考える力**をつけられたと思います。発表用スライドづくりや発表の仕方など工夫する力もつけられたと思うので、将来に生かしていきたいと思います。」



5 指導者所感と今後の課題

- ❖ PBLを通じて、自己学習力、課題解決能力、チームで協働する力、プレゼンテーション能力、論理的思考力などの基本的な力を育成することができた
- ❖ 異文化コミュニケーションの観点からは、自分の文化と異なる文化をもつ学習者相互交流による多面的意見の交換を積極的に行う姿勢が見られた。異なる文化を受け入れる難しさを互いに理解し、協働して多くの困難を乗り越える知恵や能力をこれまでよりも高められた
- ❖ しかし学習者は多様化していくので、今後はいっそう彼らにあった授業を計画・実践したい



Thank You!

参考文献

原沢伊都夫 (2013) 異文化理解入門, 研究社

八代京子 (2001) 異文化コミュニケーション・ワークブック, 三修社

大石加奈子 (2011) エン지니어リング・ファシリテーションー話し合いをうまくまとめるコミュニケーション・スキル, 森北出版

東北工業大学ライフデザイン学部
経営コミュニケーション学科
大石 加奈子